
Time Legend

蒼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Time Legend

【ZPDF】

Z0308A

【作者名】

蒼

【あらすじ】

同じ音楽高校に通う全く関係の無い五人の少女が、些細な出会いをきっかけに、ある意味とんでもない事に巻き込まれてしまう。埃をかぶっていた真白の本に、一つの物語がよつやく書かれていく。

プロローグ 埃をかぶった眞白の本

ある私立の音楽高校

物語の始まりは、と

そこには声楽からヨーロッジカルまで

あ

りとあらゆる科が設けられていた

その中で特に目立つ、それぞれ科の違う五人の少女

一人目は良家出身で小鳥の様

に澄んだ歌声を持つお嬢様

二人目は氣性の荒い男勝りの元気なチエ口弾き娘

かな音を出す秀才のフルート吹き

三人目は踊り子の如く軽や

四人目は抜群の運動神経とリズム感を操る華麗なダンサー

は絶対音感を巧みに扱い剣術にも長けているサックス奏者

五人目

……この少女達の出会いが、

「この後起じる事の引き金だ

つ
た
…

プロローグ 埃をかぶった真白の本（後書き）

…さて。

またまた小説を思いいつこちやつたので
眠らせる訳にはいかず書く事にしました。
今回の話のジャンルはどういう物なんでしょうつかね。
少なくとも一つほど入りそうなので、
ほんの少々悩んだ結果『その他』になりました。

前置きはこれぐらこにして。

少女達の名前は次回から出て来ます。

…お預けの少女もいますが（笑）
これから頑張りますので、

皆様 お暇な時にお付き合こ下せー。

No.1 Encounter

私立豊島音楽高等学校。この学校の科は、声楽からミユージカル、果てはバレエに作曲科まで設けられた私立の音楽専門校だ。

その校内では、現在四人の女生徒がそれぞれ有名である。

一人目は、荻原財閥の一人娘で澄んだ歌声を持つお嬢様、
荻原 愛架。彼女は入学してから

二年の間に、沢山のコンクールに個人で出場し、総数十の賞を受賞した声楽界の若きホープだ。

二人目はその気性の荒さや男勝りな所から、周囲の人間に恐れられている金沢 勇揮。だが、

その性格とは裏腹に、チエロの腕はピカイチで、一部の先輩、後輩からは何故か『勇さん』と言われ慕われている。三人目は、控えめな仕草に眼鏡がよく似合い、この高校きつての秀才、天谷 希美。彼女が

吹くフルートはまるで踊り子の様に軽やかな音を奏で、周囲の人間を魅了する力がある。

四人目は抜群のリズム感を上手く操り、歌や踊りに演技、どれも笑顔で見事にこなす祠堂 嘉喜。

瞬間記憶の特技を持ち、誰よりも早く物事を覚え、教諭からも生徒からも信頼されている。

この四人はお互い噂でしか聞いた事がない。会った事もないのだ。けれど、胸の奥ではお互い一度会ってみたいとも思っていた。

ある日、嘎喜は同じミュージカル科の友人である美加と一緒にショッピングに出かけた。

あちこちを歩いている内に、一人はとある路上店に目を止めた。

「あ、ねえねえ嘎喜。あの古いの何だろ?」

美加の指の先には、少し古いペンダントが掛かっていた。

あれ…?

嘎喜は、惹きつけられる様にペンダントを見つめた。

「そのペンドントが気に入つたかい?」

そんな嘎喜達に、路上店の人間が声をかけた。

「それは懐中時計だよ。今時作られる懐中時計は高いが、

この時計はアンティークもあつて、結構安いぞ」

確かに店の人の言う通り、他の店で見る値段よりも数倍安い。だがそれ以前に、嘎喜はその時計に惹かれていた。

「…これ買うわ」

「えつ? 嘎喜、買うの? これ。私は薦められないなあ…」
美加は少々顔をしかめて言つた。どうやら彼女にとつて懐中時計は古いという観点らしい。

「…私も分からんんだけど、何か気に入っちゃつてね。
はい、これ」

嘎喜はお金を払うと、懐中時計のペンダントを受け取つた。

「…じゃ、行こつか」

「あ、そつそつ…」

一人が店から離れようとすると、店の人一人を呼び止め、

「その時計、色違いの物があるんですけど、二つ以上は絶対に揃えないで下さいね。危ないですから」

「などと意味深で不安にさせる事を口走った。

「何それえ…変な事言わないでよ」

「美加は気味が悪そうに店の人を見ながら言い、嘎喜は訝しげに時計を見ていた。

翌日。嘎喜は早速ペンドントを着けて学校に向かった。

豊島音校は羨ましい事に、風紀に関しての校則はとても緩い。まあ、それは厳しくする必要がないからだが、さすがにピアスホールまで空けてはならないので、派手ではないイヤリング、ネックレスもしくはペンドント、ブレスレット等どれか一つのみならば着けてもいいらしい。勿論授業中は外すのだが。

ただ、勇揮の場合ピアスを左耳に二つ着け、更にブレスレットも着けているため、教師陣に目をつけられている。

「おはよ！ つて…嘎喜それ着けて来たの？ 懐中時計なんてやめなよお」

美加は挨拶している間に嘎喜の首に掛かっているそれを見て眉間にしわを寄せた。やはり彼女は気に入らない様である。

「ま…ま…、そう毛嫌いしないで。この時計、鏡もついて結構使えるんだから」

一人はそんな風に言い合しながら、体操着に着替えるために更衣室へ向かつた。

「は…いじや今日は踊りの方を通してみるからね、個人で柔軟体操しといてね。勿論、お喋りは厳禁！私はちょっと職員室に用があるから」

と言つと、教師は体操室を出て行つた。

各々準備を始めている中、嘎喜はあの店の人の言葉が頭に

引っ掛けっていた。

「（何なの…？“三つ以上絶対に揃えたらいけない”とか
“危ないですから”とか…。あの人どうしてそんな事を…？）」
珍しく進んでいない様子の嘆喜に、クラスの人々は心配そうに
見ていた。

「「めんね？ちょっと用事に手間取っちゃって…じゃあ始めるわよ！
最初のフォーメーション見せて！」

教師がそう言うと同時に嘆喜は物思いに耽るのをやめ、生徒達は
初期の立ち位置に板付いた。

「緞帳が上がったらすぐに音楽掛かるわよ！はいスタートーーー！」
教師が手を叩くと同時にジャーン！といづイントロが入り、生徒達
の顔が

一瞬で変わると、それぞれの位置に散らばって踊り始めた。

「ほりー！そこもうちよつと離れて！実咲、知子！貴方達は離れ過ぎー！
もう少し詰めてーー綾香、もーと前に出て振付大きくーー！」

教師は大声で生徒達に言つ。

そんな中でも嘆喜はしつかりと、更に笑顔をプラスして踊つてい
た。

「さあ そろそろ見せ場よ！皆フォーメーションしつかりねーー！」

教師の合図に従つて、生徒達は一人一組のペアになつて円を形取る
と、

片方がもう片方の膝を足場にして外側に向かつて一回転を繰り出し
た。

「千佳、真由美ー回転するタイミングがちょっと早すぎるわよー！
もーとしつかりと音楽聴いてタイミング合わせてーー！」
やはり教師の声が飛ぶ中、一時限目は終了した。

「あ 疲れたあ。あつ！ねえねえ嘆喜、これから自由でしょ？校内なら

教室出てもいいみたいだから、これから本館に行つてみない？」

更衣室を出た嘆喜を美加が呼び止めて言った。

この高校は五つの館に分かれている。北館には弦楽器科、南館には鍵盤科がある。声楽コースはこの鍵盤科に含まれている。西館に管楽器科、

東館に打楽器科やミニユージカルコースがあり、本館とは渡り廊下で繋がっている。その為、各館の通り道になつてている本館は各科の公共の場やふれ合ひの場となつてている。

「……本館？」

「そ！嘆喜、あそこまともに行つた事ないでしょ？明日から本番に向けて

強化期間に入るんだから、じめらくあそこ行けないのよ？だから、今日の自由時間くらい違う科の誰かと話してみたら？」

「……分かった。じゃあ行つてみよっか」

美加の強い押しに、嘆喜は苦笑しながらも頷いた。

この時の判断が、後に信じられない事を起す引寄せ金にならうとは、

一体誰が考えようか……

「さて……と（どうしようかな……）」

自由時間になり、取り敢えず同じクラスの由貴と梨那、美加と

一緒に本館の多目的広場に来たのはいいものの、一体誰と話せばいいのか分からぬ。そして何より……

「「「キヤ ッ！ 祠堂先輩よ つ……」「」

とこう甲高くて黄色い声がうるさくてならない。

「そうだつた…… 嘎喜つてば全校生徒の間で有名なのよね」

嘎喜の横で美加が溜め息をつく。由貴が「まあまあ」と宥めている中、

今度は北館側から黄色い声が響いて来た。

人ごみで前が見えない為、身長が182cmもある梨那に見て貰うと、

「あ、 つ……あれ……弦楽器科チョロースで有名な……
あの金沢 勇揮さんじゃん！」

少々甲高い声で言う梨那に三人は、特に嘎喜は驚いた。

実を言うと、嘎喜は自分以外に有名な生徒に会つた事がなかつた。表には出そうとしないが、正直言つてその人達と会つて話をしてみたかったのである。

嘎喜が言い出そうとすると、次は西館から黄色い声があがつた。人ごみで見えないのだが、周りの生徒達の叫び声から察するに、どうやらあの秀才、天谷 希美が来たらしい。更には南館からも声楽界のホープ、荻原 愛架も本館に来る様だ。

つまり、この本館に東西南北各館の有名人が揃う事になるのだ。嘎喜はこの事を聞いても未だ信じられずにいた。長い事思つていた事がたつた今現実となるのだ。まるで夢の様である。

そんな様子だつたため、嘎喜は胸につけていたペンダントがうつすらと光り始めていた事に、全く気が付いていなかつた。

最後に愛架が本館の多目的広場に足を踏み入れた途端、四人のペンダントにブレスレット、ネックレスそしてポケットの中が強く光り始めた。真っ白な眩しい光が広場を包み込んでいく。

「なんだ……？」

「時計が……！」

「熱…つ…！」

そんな声が聞こえる中、嘎喜は光の中で店の人の警告を思い出した。

その時計、色違の物があるんですけど、

三つ以上は絶対に揃えないで下さいね

「まさか…あの店の人気が言つてた危ない事つて……つ…！」

その叫び声さえも周りの喧騒に飲み込まれてしまい、場内は完全に光に満たされ、愛架と勇揮、希美に嘎喜はあまりの眩しさに目を瞑つた。

しばらくして、急にふつと床の感覚がなくなりたと思つと、

急に落下し始め、不思議に思つた四人は目を開けて驚いた。

「…ここ学校の筈だろお

…？」

勇揮は大声で叫んだ。

既にそこは豊島音楽高等学校の多目的広場ではなく、それぞれの雲の上に城や山々が立ち並んでいる、何とも不思議な光景だつた。

「それより！まだ下へ落ちてますわよお

つ…！」

愛架が青い顔でヒステリックに叫んでいる間も、落下は留まる事がない。

「…まよいですよ……」のままだと私達、確實に背中に翼が生えますよ

「こんな時にどうしたらそんなに冷静でいられるのよ

つ…！」

四人は悲鳴をあげながら、どんどん下へ下へと落ちて行つた。

No.1 Encounter (後書き)

…もし続きを待っていた方がいたなら謝ります。

二ヶ月もかかってしまった本当にごめんなさい！！！

二学期が始まってからというものの、なかなか時間が取れなくて執筆出来なかつたんですつ！！

文化祭が近くなつて、余計に部活との両立が…」

…謝罪はこれくらいにして。

少女達の名前、やつと出て来ましたね。

五人目の少女の登場は、まだまだ先になります。

因みに、話の最中で「これ違うんじゃないの？」とか疑問を持つた方ももしかしたらいるかも知れませんが、これはあくまで苔の想像から来ますので、その辺は「ア」承くださいね。

次回は四人が一体どうなつたのか、そしてあの懐中時計の謎が明らかになります。そして、しばらくはこの四人の少女達のストーリーを楽しんで下さい。

勢いよく落ちていた四人は、地上10m辺りで急にそれぞれの懐中時計が光り出したのに気付いた。

「光つてる……」

「さつきほじじゃね けど……」

光はゆっくりと広がり、それと共に四人の身体も浮いていく。

「浮いてる……？」

「まるで夢を見てるみたいですね……」

「……凄い……どんな原理で浮遊してるの？」

こんな時でも希美は必死に仕組みを突き止めようと頭を働かせる。そうこうしている内に、足元に地上が見えた。四人が足をつけると、懐中時計の光はゆっくりと消えていった。

「消えましたわね……一体何だつたのでしょうか……？」

「んな事より、もつと重要な事があるだろ」

愛架がネックレスに着けている懐中時計を弄りながら言つてみると、割り込む様に勇揮の透き通つた低めの声が聞こえた。

四人の目の前には、空に浮かぶ山や城、泉が見える世界が広がつている。

「……」「……」「……」「？」

「少なくとも学校じゃねえ事は確かだよな」

希美が少々怯えた様子で辺りを見回し、勇揮はイラついた感じで前髪をかきあげる。

「恐らく日本でもありませんわね。こんな光景は日本では見る事さえ出来ませんもの」

「うん……多分……私達が知つてゐる世界でもないと思うわ……だって、山や城が浮かんでるなんて事、私達の世界じゃありえないし……」

考えながら言つ愛架の言葉を嘆喜が否定する。

「……じゃあ、ここ一体どこなんだよ？」

かきあげた髪をクシャクシャと弄りながら、勇揮が嘆喜に問つ。

嘆喜は少し言いにくそうにしながらもはつきりと言つた。

「……異世界に連れて来られたんじゃないか、つて……」

「そんな！ありえないですよそんなお伽話の様な事……！」

「でも、実際に私達はこの光景を目の当たりにしてるわけですから

……」

信じられないといった表情で言つ希美に、愛架は辺りを見回して返す。

ぐつと詰まる希美に、愛架が笑顔で言つた。

「まあまあ。私達が今どこにいるのかも分かった事ですし、それぞれ自己紹介でも致しません？」

のほほんと言つ彼女に、少し不安になつて来る三人だった。

愛架は右手を胸に置くと、綺麗な笑顔を浮かべて言つた。

「では、私から。私は鍵盤科声楽コースの荻原 愛架と

申します。十六歳の高校一年生ですわ」

「……ちよつとまで、荻原つて…まさかあの声楽界のホープか！？」

「はい。恥ずかしながら、そう呼ばれてますわ」

勇揮の驚いた様な言い方に愛架は笑顔で頷いた。三人は顔を見合わせた。

「……まあいいや。次は俺な。俺は弦楽器科でチヨロコースの

金沢 勇揮だ！因みに十七歳の高一だぜ」

少々雑な自己紹介に、今度は希美が聞いた。

「え…金沢 勇揮さんつて…『勇さん』と言われ慕われているあの金沢さんですか……！？」

「ああ、そういうやあそんな風に呼ばれたりするつけな」

動搖している様子で聞く希美に、勇揮はニヤリと笑みを浮かべて言う。

声楽界のホープに不良のチョロ弾き。こんな豪華な顔が揃つてゐるとは。

「では、次は私ですね」

希美はゆっくりと立ち上がり、一礼して自己紹介を始めた。

「私は、管楽器科のフルートコースを選考している天谷 希美といいます。

十六歳の高校二年です。 因みに、皆さんからは何故かは知りませんが、秀才のフルート吹きと呼ばれています……」

少し頬を赤くして言う希美に、愛架達はまたもや目を丸くした。
「貴方があの希美さんですね……お会い出来て嬉しいですわ」
愛架は綺麗な笑みを浮かべながら言つた。

「さて、と……最後は私ね」

嘎喜はそう言つと、地を蹴つてくると後方に一回転をすると、見事に着地した。

「私はミュージカルコースに所属してゐる祠堂 嘎喜よ！因みに十七歳の高校一年！よろしくね」

満面の笑顔で言う嘎喜に、勇揮は目を輝かせた。

「お前が祠堂か！いや 会つてみたかったんだよなあ！！」

二人は握手しながら楽しそうに話す。その横では愛架と希美が何やらとても難しい話を繰り出している。

そんな様子の四人の上空から、

「お主達は一体いつまでじやれておれば気が済むのじや」

という怒氣が含まれた声が響いて来た。

四人は弾いた様に上を向いて見回す。勇揮は崖の上に人影を見つけていた。

「テメ 誰だよ……」

彼女の叫び声に答える様に、影は数十メートルほど上空にある崖から勢いよく飛び降りて来た。

「……お主達が異世界に『転生』されたという伝説の戦士か」

四人にそう言つたのは、自分達よりも身長が低く、妙な格好を

して、

いかにも重そうな杖を持つた少女だった。

「何だよその偉そうな態度は！－テメエ どうからどう見たって

俺より年下だろ！？」

勇揮が額と手の甲に怒りの象徴を浮かべ少女に指をさす。

（ 良い子は指差さないでね。：作者談 ）

すると、少女は左手に持っていた杖を勇氣の頭に思い切り振り下ろした。

「何を失礼な事を抜かすか！ 我はこいつ見えて528歳じゃ。 10の頃から

背の成長などとつに止まつておるわ」

「何い－！－？」「ええええええ－！－？」

三人は驚きの声をあげた。

「まあ…かなりお若く見えますわね。 とても528歳とは思えませんわ」

こんな時でも、愛架はのほほんと言つ。

「『若い』で納得出来る限界を軽く超えてますよ、528だなんて
……110歳でも

驚きなのに……」

希美は座り込み、頭を抱えてうへんと唸つていて。

「……お主達よ、じゃれ合ひはここまでじゃ」

少し低い声に変わり、不思議なオーラを纏う少女に、四人は思わず
圧倒されかけた。少女は続けた。

「お主達をこの世界へ呼び出したのは誰か分からぬ。しかし、じゃ。
…今、お主達や我ら、沢山の世界に大きな『ビビ』が入つておる
のじや。」

それらの世界が危ういのは変わらぬ

少し俯く少女に、嘎喜は何かひつかかりを憶えて言つた。

「…世界に『ビビ』？」

嘎喜の言葉に少女は深く頷いた。

「この世にはお主達の世界の他に数多の世界が存在する。もちろん、普段は互いの世界に影響されず干渉されぬ様に、世界と世界の間は高度な魔法や呪術の壁が立ち塞がつておる。……じゃが、どうやらこの頃、その幾つもの世界の間にある筈の壁が消えている。

そのせいで、互いが互いの世界に影響を及ぼし、世界自体に『ビビ』が

入つてしまつておるのじゃ

一しきり言つと、少女は深い溜め息をついた。

「世界に『ビビ』…つまり『傷』が入つているのは分かりましたが、それが

私達と一体どういう関係があるのですか？」

分からぬといつた様子で希美が聞く。この様子では、彼女の頭で考えても

答えを出せなかつたらしい。

「……お主達の話は三百年前に遡るのじゃ」

そう言つと、少女は杖を構えた。すると、杖の中から勢いよく分厚い本が

飛び出して来る。

「うおつ！？おい！危ね だろがよ！…！」

「お主ほどの優れた反射能力があれば楽に避けられるであろう」
思わずぶつかりそうになつた分厚い本をしつかりと受け止めた勇揮は不平を言つたが、すぐ少女に返されてしまい返答に詰まつていた。
「その本はこの世界に語り継がれてきた伝説を細かく記した古文書

じゃ。

自分達の事は旅の道中でも読んで知るが良い

少女の勝手な言動に、一瞬四人は自分達の耳を疑つた。

「ちょ、ちょっと待つて下さいません？貴方、今何と仰いました？

愛架の言葉に、嘎喜達は空耳であつて欲しいと願つた。

だが、その願いは脆くも崩れ去る事となつた。

「おお…言い忘れておつたの。お主達にはこの世界や他の世界に入つた『ヒビ』を消し去る旅をして貰いたい」

軽く言う少女に、勇揮は掴みかかつた。止めようとする希美的手を振り払い、

「てめえ…！何勝手にじじちやじじちや言つてんだよ…『旅』だとおも！」

「ふざけんじやねえ…！こちとら毎日忙しいんだよ…！」

と少女に怒鳴りつける。三人は必死に一人を引き離そうとする。だが、少女は何の反応もなく、ただ勇揮の額に人差し指をそつと当て、

ブツブツと何か呟いただけだった。

しかし、次の瞬間に三人は驚きのあまりその場に立ち尽くしてしまふ。

少女が指を離すと、勇揮は瞬く間に石像と化してしまつたのだから。「金沢さん…？」

希美は石となつた勇揮を叩いたり搖すつたりするが、勇揮の石化が解ける

様子は見られない。

「案ずるでない、仕置きをしただけじゃ。ちゃんと生きておるわ。尤も、身動きだけは取れんがの」

少女は乱れた服を直しながら言つた。そして三人に向き直ると、

「手荒な真似をしたのは謝る。しかし、お主達が務めなければ世界は破滅への道を歩むばかりじゃ……頼む」

頭を下げて言う少女に、嘆喜は頭を上げさせると、

「……分かった。何だか知らないけど、私達がいる世界も危ないんでしょう？」

やつてみる

「私もやりますわ。どの世界にも危険が迫つていて、それを防ぐのが私達しか

出来ない事でしたら、答えは決まりますもの」

「そうですね。私達が出来る限り、やらせて頂きます。ただ……」

「ここまで言つと、希美は俯いてしまった。少女は顔を覗き込み、

「……ノゾミ、と言つたかの。遠慮せずとも話してみるがいい」と微笑した。その可愛らしい笑顔に希美はつられる様に言つた。

「…私達は高校生です。昼間は授業があつて抜ける事は出来ません。授業が終わつた後でも、帰りが遅くなれば両親が心配します」

希美の言葉に、残りの二人は気まずそうな顔をした。

どうやら、一人はその事を考えずに返事をした様である。

そんな三人とは裏腹に、少女は大声で笑い出した。

「心配するでない。そこは我がどうとでも出来る範囲じゃ」

笑いながらそう言つ少女に、希美もどうやら安心した様だ。

「…それでは、気兼ねなくやらせて頂きます」

そう微笑んだ希美の遙か後方で、『何か』が目を光らせていた事には、誰も気付かなかつた。

深い闇に包まれた森の奥では、空間に虹色の裂け目が現れ、同時に何かの影が飛び出した。

その影はしばらく森の中を駆け抜けている内に、段々と人の形を見せていく。次の瞬間で、影は人間の姿になつた。

漆黒の衣を纏う者は、まっすぐに森の中を進んで行つた。

その内、大きな広場に出ると、漆黒の者は呪文を詠唱した。長い呪文を唱えていると、広場になつてている空間が歪み始めていた。

歪みが完全に消えると、その広場には闇のロープを纏つた者達が三日月を描く様に立っていた。

「フィアルグ様…『外』の様子はどうでしたか？」

一番近くに立っていた、闇色の髪を背中まで伸ばした女性が

漆黒の者 フィアルグ に問うた。

「…『壁』を保つ為に人間界に転生した筈の戦士が現れた」

フィアルグの一言でその場は騒然とした。

「三百年前の伝説が甦るのか…」

「あれだけは避けたいと思っていたのに…」

人々に言う者達の顔は、皆 同じ様に焦っていた。

「ちょっと止めなさいよ…」

「だがフュイレン、これでは我々の計画が駄目になってしまつ」

「…キュラーまで…」

フュイレンと呼ばれた先程の女性は、騒ぎを静めようと一喝したが、キュラーという男性の困った様子で一気にしゅんと萎れる。

フィアルグが口を開く。

「現れた戦士達は十六、七の子供だ。伝説など成就しない不敵に笑う彼に、どうやら周囲の者も安心した様だ。

しかし、フィアルグは厳しい表情を見せたまま言い放つた。

「だが、『念には念を』というからな…ソルヴィル」「はっ！」

ソルヴィルと呼ばれた女性は、一礼した途端ふつと消えた。フィアルグは踵を返しながら呟いた。

「『壁』はこの手で消してみせる 必ず」

あああ……またもや「めんなさい」……
また一ヶ月掛かつちゃいました……」

中間試験や実力試験に期末試験、

一ヶ月試験やつてたと言つても

過言ではないくらいにして……」

受験まであとわずか。入試が怖いです……（泣）

今回の話はどうでしたか？

楽しんで頂ければいいんですけれど。

でも結局、懐中時計の正体分かりませんでしたね」
すみません。本当に行き当たりばつ当たりなもので、
予定がずれてしまふんです。

今度は明らかにさせますから……

次回は四人と謎の多い少女の元に、更に謎の深い
闇の男・フィアルグの刺客が襲撃します。
初戦で四人はどういう行動をとるのでしょうか。
乞うご期待を！！

「さて」

突然少女が口を開く。四人（内一人は石化したままだ）が振り向くと、

少女は複雑な表情をしていて動かない。

「まずはその眠りこけておる魔力をどうにかせねばな」
やつと口を開いた途端、彼女は妙な事を言つ。

「魔力……？」

思わず嘆喜が聞き返すと、少女は頷いて杖を構えた。

「時の大地よ、守人の鍵を渡し十字界の扉を開け。扉の奥で眠りについた

彼の者達のかつての力よ、その目を覚まし、導く者を与えたまえ」
少女が唱えると、杖についている大きな宝石が光り始め、そこから強い

風が四人に吹きつけた。

風に当たつた途端、勇揮の石化が解けた。宝石から、四人に向かつて

それぞれに違う色の光が飛び出した。愛架には桃色、勇揮は群青、
希美に黄緑、嘆喜には橙色の光が。

四者四様でその光を掴むと、光は反応するように収まり、ある形を見せた。

「……鍵、ですか？これ……」

愛架がしげしげと見つめている。少女は構えていた杖を降ろすと、
「お主達の力は覚醒しておらん上に安定しておらぬ。その鍵は、
いわばコントロールするための物じや。雑に扱うでないぞ」
と言いながら、既に群青色の鍵を捨てようとしている勇揮に目を向けた。

「この妙ちくりんな鍵が何の役に立つって んだよ

言われてしまい何も出来なくなってしまった勇揮は、不機嫌な顔でぶつきらぼうに少女へ問い合わせる。少女は片手で杖を持ち上げる。……あんな大きくて重そうなものを、どうして片手でひょいと持ち上げる

事が出来るのだろうか。

「懐中時計を持つておるであろう。それぞれの時計に手で触れたままで、

鍵を天にかざすがいい」

四人は少女に言われた通り、それぞれ懐中時計に触れ、杖から現れた鍵を

太陽の照る空へかざす。

すると、自然と彼女達は呪文を詠唱していた。

「天と海と大地より守護を受けし者よ、我らの声に耳を傾けたまえ」

「炎と風と光の導きにより、星と太陽と闇の精靈に我らの意志を伝えよ」

「我らに眠る秘めたる力の解放とともに大精靈の守護を授けたまえ」

「永き眠りに生きる者よ、今こそ眠りを解き放ち我らに彼の力を与えん」

「汝ら四戦士！」と認めんとする事を今こそ誓約する」

最後に少女が唱えた途端、シユツといつ音とともに、四人の鍵は一瞬光を帯びて変化した。

愛架の両手にあつた鍵は細長いステッキだ。頂には少し大きめの十字架が

掲げてある。自分の背とあまり変わらないそれを、愛架は慌てて掴んだ。

先ほど勇揮が捨てようとした鍵は長剣。竹刀より少しだけ重い剣を鞘から抜いてみると、うつすらと青い閃光が走る。

希美が大切そうに握っていた黄緑の鍵は弓矢へ変わった。弦の張つてある

部分は羽のモチーフが飾られており、その背にはいつの間にか矢筒も矢もある。

右手に乗つっていた嘎喜の鍵は双刀。片方の柄の先端に、丸いオブジェがあり、

もう片方の柄には、それを反転させた様なオブジェがついていた。「…お主達の前世の力が眠りから覚め始めたのである」

そう言われた四人だが、いまいち実感が沸かない。少女が苦笑して、「仕方あるまい。完全に覚醒するまではかなり時間がかかる。それまでは

何なのか分からんだろうな」

と言い、両手で横向きに持ち、杖を構え直す。

「…さて、今度は魔法を教えねばな」

言つが早いが、勇揮と嘎喜に風の渦が纏いつく。途端、二人は眠気を感じて

目を閉じた。

「勇揮さん！？」

「祠堂さん！？」

愛架と希美が叫ぶが、動く事が出来ない。

一人の姿が渦で完全に見えなくなると、少女は少し低い声で言い始めた。

「 、古より四大精靈と大精靈の守護と共に受けし者よ、

永きに渡る契約を再び交わし、各々の聖なる象徴の力を今授からん、」

そう言つが早いが、少女の杖の宝石から青と橙色の光がそれぞれの渦に射し込む。

渦が光の色に染まるごとに、ゆっくりと消えていった。

勇揮と嘆喜の目が開かれると、同時に愛架と希美を拘束した何かも消える。

「 …では、次は汝らじやな」

少女がそう言いながらもう一度杖を横向きに構えた、その時。

「やつはせせまなせよ

突然響いたその声に、四人は辺りを見回す。ただ、少女だけは杖を構え直して固く目を閉じていた。

「…本当に子供なんですね。これで私達の相手がちゃんと出来るんですか？」

まどうけんじや
魔導賢者さん

「その声は……お主、ソルヴィルじゃな！？」

「い」答です」

聞こえて来た方向に向く五人。

そこには、ローブをはじめ黒を基調とする服を纏つたショートカットの女性が、腕組みをしたまま宙に浮いていた。

「おいおいおい！今度は何なんだよ！？」

勇揮が少女に向かって言つと、少女は緊迫した面持ちで返した。

「……世界の間の『壁』を壊そとと田論んである過激派の者じや」少女の言葉に三人は息を飲む。だが、愛架だけは、

「では、の方は完璧に敵方ですわね」

などと呑気に言つてゐる。希美は顔を空色に染めていて今にも倒れそうだ。

そんな中、少女の両隣にいる勇揮と嘎喜は硬い顔をしたままで、武具を構えている。

「サキ、ユウキ。今のお主達ではまだ無理じや」

その言葉に一人ははつと少女を見る。少女は杖を掲げて唱える。

「、光の鎖よ、彼の者達に進むべき道を示せ、！」

少女が杖を振るつと、一本の樹木が白く光り始め、四人を絡め取ると上に持ち上げていく。

「ま、待つて！私達、まだ…貴方の名前を聞いてないわ…！」

嘆喜の言葉にきょとんとする少女だが、数秒後にふんわりと笑つた。
「我が名はスイルフじゃ。魔導賢者スイルフといつ。… さあ、もう
行くがよい。まずは導師フュリアラに会うてじつくりと話を聞く
事じや」

そう言いながらスイルフがゆっくりと杖を掲げると、光る樹木は巨
大な鳥へと

その姿を変え、四人を乗せて一気に飛び去つていった。

「スイルフ つー！」

「てめえ死んだらただじゃおかね からな ーー」

「「どうかご無事でいて下さ いー！」」

こんな声が小さく聞こえると同時に、四人は空から消えてしまった。
「相変わらずですね、貴方は。どうも他人に甘い所がある」
そう言つてクスクスと笑うソルヴィルに、スイルフは警戒を
解く事なく言い放つた。

「十年前助けた時は誠実で可愛らしい娘だつたというのに、恩を仇で
返しあつてのう……ソルヴィル」

「お褒めに預かり光栄にござります」

スイルフの皮肉に笑顔で答えるソルヴィルの両手に、突然糸が絡ま
つて来る。

その様子に、スイルフは驚きの表情を隠せない。

「糸…！？お主っ！…まさか…あの法術を独学で会得したのか！？」

「独学なんかじゃありませんよ？基礎を少しばかり教えて頂きました」

言葉も出せず驚いているスイルフを尻目に、ソルヴィルの両手には
糸がどんどん

集まつて来る。

全ての指に糸が掛かると、ソルヴィルは微笑を浮かべ、一言。

「…では、始めましょうか」

刹那、スイルフの後方の木から何かが迫つて來た。

「、界、！」

杖を地に突き立てて叫ぶ様に唱えると、後方の木から迫る『何か』を薄い膜が弾く。パシンという乾いた音が響いた。

「結界ですか…でも、それだけではこの法術は回避出来ませんよ」そう言いながら腕を振り回すソルヴィル。その動きに糸が連動する。そして、パンという音とともに、スイルフの身を守つていた薄い膜　　結界が弾ける様に消え失せていった。

「…やはりお主、術の素質があつたのじゃな。十年前、『獵人』に襲われた

お主を救つた時にそう感じたが、間違いではなかつたな…」

「しかし

「……その力、その法術は、この数多の世界を守る為にこそ相応しいものじゃ。

己が存する世界をわざわざ壊す為に用いる様なものでは決してないぞ…！」

ルーランさえ生きていればこの様な事、全くないというのに…」

「死んだ伯母の事など関係ありません。既に過ぎた事です」

スイルフの言葉が癪に障つたのか、ソルヴィルは一気に両手を振り下ろす。

恐ろしいスピードで、糸がスイルフに降り掛かつた。

スイルフは杖で難なく糸を振り払う。

だが、ソルヴィルはこの行動を見越していたらしい。払われた糸を、まるであやとりの様に操つている。

最後に勢いよく両手を広げると、糸はスイルフに巻きついて後ろの大木に

縛り付けた。その時の衝撃で、スイルフは杖を落としてしまつ。ぎりぎりと糸が身体に食い込む。きつく締め上げられ、スイルフは思わず

うめき声をあげる。

「しばらくはそうしていて下さい。じきに誰か来るでしょう」

いつの間にか、ソルヴィルがスイルフの前に立つている。

彼女の両手にはもう糸はなかつた。糸の両端は別々の木に巻きつけられている。

「では、……『きげんよ』」

笑顔でそう言つと、ソルヴィルはふわりと宙を翔けて行つた。

「戦士達よ……お主達は『記憶』^{かこ}を取り戻さぬ限り完全に覚醒する事は叶わぬ……だが、覚醒しなければあの者どもに打ち勝つ事も

ままならぬのじゃ……『記憶』を思い出して世界を救うてくれ……

（フュリアラよ、ツルギとサキ達を頼むぞ……）」

ソルヴィルの糸に対抗しながらも、スイルフは空を見上げ願つていた。

その頃、嘎喜達は鳥の背に乗つたまま、スイルフの安否を気にしていた。

「スイルフ……私、やっぱり心配だわ！」

すつと嘆息が立ち上がる。鳥の首に腕を回し、

「ねえお願い！私達をスイルフの所へ戻して……」

「……戻るのはダメです」

叫ぶ嘆息に、希美が鋭く言い放つ。その言葉に、三人が彼女の顔を見る。

「スイルフさん、さつき別れる前に言つてましたよね？まずは『導師フュリアラ』

さんに会つてじつくりと話を聞け、つて。きっとスイルフさんは、私達に

その人の所へ早く行つて欲しかつたんですよ。という事は、今この世界は

それだけ状況は好ましくないという事になります。もしここで私達がさつきの場所へ戻つたら、彼女の本当の望みを潰してしまつんです。だから……

私達があそこへ戻る事は許されません」

凛として言う希美に、嘆息は黙り込んだ。その横で、

「あのヤローだから大丈夫だろ。やたらと長生きしてんだし」

あんだけ力使えんなら心配なんざいらねえよ、とあぐらを搔きながら言う勇揮の

視界に、先程会った女性 ソルヴィルが映つた。

「…テメエ！…あのチビはどうした！！」

素早く立ち上がると、勇揮は長剣を構える。他の三人も、勇揮に続いてそれぞれの

武器を構えた。

「あの人はしばらく動く事が出来ません。何しろ少し悪戯が過ぎましたので」

そう言いながらクスクスと笑うソルヴィルの目は全く笑つていなか

つた。

彼女の様子に、希美は再び自らの顔を青くした。

「そんなんでビビつてんじゃねえ よ希美」

突然耳打ちされ、希美ははつとしましたまま左を見ようとした。しかし、勇揮の

手によつてそれを止められる。

「お前と愛架は後ろから援護しろ。頼むな」

そう言つうと、勇揮は嘆喜を呼び引き寄せて小声で話す。

「あの時の状況だと、魔法とやら使えるのは俺と嘆喜だけだ。俺達は前に

立つてあの女に仕掛けるぞ。愛架と希美には後ろから援護を頼んである。

合図出したら始めるぞ。いいな

四人が鳥の上で落ちない様に移動し始めた事に、ソルヴィルは首を傾げた。

「何の真似でしょか皆さん？抵抗しても無駄ですよ」

「はつ！そりゃやつてみなけりや分かんねーぜ？行くぞ……」

勇揮の言葉が合図になり、希美は弓を構え相手に向かつて一度に三本の矢を放つ。

それぞれが違う方向へ飛んだ為に、彼女はどの方向へも避けられず、左肩と左肩と

右足に傷を負つた。

「へえ……なかなかやるじゃね か！ただの怖がりで恥ずかしがりと思つたが

飛んだ間違いだぜ」

ヒュウという高らかな口笛とともに、勇揮は一カツと笑いながら希美に言つた。

「……家が『道の道場を継いでまして、私も小さい頃から教わつていたんです」

希美は勇揮のからかいに乗らず、しつと返した。その様子に、勇

揮は少し驚いた。

「どうやら、希美は弓を持つと性格が少し変わる様である。

一方、愛架は杖を祈る様に持つてブツブツと何か呟いていた。自身でも驚くほど

すらすらと早口で唱え、両手が勝手に動いていた。

「嘎喜さん！」

その一言をきっかけにして、嘎喜は素早く双剣を片手に持ち、前に出した片手を広げて構えた。

深呼吸したこの一瞬後、嘎喜は人生で初めて魔法の呪文を唱えた。

「ディ・アプレイス・オーグスト！！（大地の精よ、無数の矢となつて敵を射て！！）」

詠唱が終わつた瞬間、遙か下方から何本もの矢がソルヴィルを襲つた。

「…っ！？」

間髪入れず襲撃する矢を避ける事も出来ず、数本が彼女を貫いた。だが、途中で突然彼女の周りに薄い何かが現れ、たくさんの矢が弾かれて消えた。

「 結界ですか」

「…ええ、その通りです」

ポツリと呟いた希美に、ソルヴィルは痛みに顔を歪めながらも笑つて答える。彼女から

滴り落ちていく血は、希美の呼ぶ『結界』の中にわずかにたまつていった。

「予想外ですよ、お嬢さん方…お名前を伺いたいですね」

「ハンツ！そんな怪我で言う事か？…まあいい。俺は金沢 勇揮だ」指に糸を絡ませながら聞く彼女に、鼻で笑いながら勇揮は答えた。

「私は荻原 愛架と申します」

「わ、私は天谷 希美です」

「…私は嘎喜。祠堂 嘎喜よ。貴方…ソルヴィルとかいつたかしら。まだ何か

やるつもりなの?」この状況だと、どう動いても貴方は不利にしかならないと思うけど」

愛架と希美は少々慌て氣味だが、勇揮と嘎喜は落ち着いたままである。

「…なるほど。『イーミックタム・レジヨンド（懐中時計）』を持つとここまで変わるんですか。

「これは少し気を付けなければなりませんね」

それでは一度出直して来ます、と言つと、ソルヴィルの両手に絡まつていた糸が

彼女を包み込んだ。

「逃がすかよっ！！」

そう叫ぶと、勇揮は長剣を横向きに構えた。

「グウィールス・ヴァン・アフレートー！（水の精よ、龍の姿を借り標的を捕えよ…）」

呪文を唱えると、構えた長剣から龍を形取つた水が現れ、切つ先をソルヴィルに向けると

水は剣から離れて彼女を取り囮もうとした。

だが、一足遅く、既にソルヴィルは下半身が消えた状態だった。

「次に会つのを楽しみにしてますよ。アイカさん、ユウキさん、ノゾミさん。

そして サキさんも

その一言を言い終えた途端、完全にソルヴィルの姿が消えた。
…同時に、勇揮がかけた魔法も解いて。

「……ちくしょう…！」

あと一歩だったのに………」

拳を強く握りながら叫んだ勇揮の声は、広い空に響き渡っていた。

いつも、皆さん。

…相変わらずの蒼です。

先日滑り止めの入試を受けてきました。
結果は少し先になるといつ、受験も佳境に入つて来た
この時期に投稿します。…ちょっと大丈夫かな…」

さて、今回のストーリー。

手がかりになりそうな物が結構出て来ましたね。
懐中時計の正式な名称もここでやつと出せました。
…また内容は持ち越しですけど…」
「…なんどん先延ばしになつてゐなあ……（汗）

次回は導師フュリアラが、皆さん（と四人）の疑問を
解いてくれると思います。

『イーミックタム・レジエンド』といふ名の由来は？
今回 ちらつと出た『ツルギ』は何？？
答えは次の話で明らかに！
どうぞご期待下さい！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0308a/>

Time Legend

2010年10月21日21時04分発行